

## 平成17年度第2回学校協議会議事録

日 時 平成17年12月19日(月)15:40~17:00

参加者 (敬称略・順不同)

### 【人権小委員会】

大溝憲久氏(池田子供家庭センター) 大角正弘(本校教頭) 宮川容子(本校中学部・研究推進) 村井学(本校中学部・研究推進) 吾妻健(本校高等部) 辻和彦(本校高等部・研究推進) 山田幸栄(本校高等部・研究推進)

### 【地域連携小委員会】

三阪義英(あかつき福社会) 上野葉子(小学部保護者) 高田裕文(本校教頭) 中井宣行(本校事務長) 中村賢次(本校高等部・地域連携委員会) 藤原ゆかり(本校高等部・地域連携委員会) 依藤みどり(本校中学部・地域連携委員会) 石井幸子(本校小学部・地域連携委員会) 大川倫弘(本校高等部・情報管理) 岩本敏子(本校小学部・進路) 松尾共子(本校高等部)

### 【支援計画小委員会】

内藤正敏(元箕面病院副委員長) 木津ひとみ(さつき障害者作業所長) 山口正和(本校小学部・教務) 泉英二(本校高等部・進路) 早原園子(本校中学部・地域連携委員会) 中村仁美(本校小学部・地域連携委員会) 谷口美津代(本校小学部・自立活動) 山本由紀子(本校小学部・教務)

## <人権小委員会>

【大角】第二回目は小委員会ということで課題別の研究会を進めます。

【辻】昨年度の学校協議会を受けて、「来年度は教職員研修だけでなく、児童生徒の人権学習もできるだけ実践的な形で取り組んで、みんなが身近な人権意識を持つことを念頭に置くべきだ」という申し送りがありました。それを受けて4月の段階で次の方針を出しました。即ち「児童生徒の人権教育」「職員に対する人権研修」を並行して実践していくことを今年度の目標にしています。

セクシャルハラスメント研修については、小中学部は5月に、高等部は6月に、教職員研修をおこないました。学部別にやったことで参加者も多く、高評を得ました。アンケートもとり、充実した研修だったと思っています。来年1月にはエンパワメント代表の北野真由美さんを講師に招き、教職員全体の研修を行う予定です。

さて、児童生徒の人権教育について報告します。4月以降、各ホームルームで行われています。高等部では、B1グループの社会科の授業が中心でした。そこでは副読本「にんげん」の「沖縄戦」を教材として平和について討論したり、感想文を書いたり、話し合ったりしました。1学年では、「みんな仲良く」というテーマで、同じ形で学習しました。一部内容が違いますが、2学年ではロングホームルームで性被害の防止について、実際に教員が劇に参加する形で行いましたが、社会では悲惨な性被害の事件がおきており、一度の授業だけでなく、もっと深めていく必要があると痛感しています。「沖縄戦」「かさ地蔵」などを読んで、優しい気持ちや思いやりについても考えてきました。また、実際の事件、たとえば、「ナイフを持った人から『道を教えてくれ』と言われて誘われたらどう

するか」ということについて、劇を見ながら学習しました。

小学部での教職員研修については、「今日の障害者の人権と教育をめぐる諸問題」をテーマに人権研修を行いました。まず、障害を理解したうえで人権を守ることが重要であることを確認し、質問形式で、「具体的に自分たちが直面する課題にどう対処すべきか」、「青年期の教育とはどうあるべきか」、また、「卒業後の支援として学校は何を求められているのか」というテーマについても研修しました。教育的なニーズ、ケアを受ける権利、ノーマライゼーション、自立支援法といった課題について議論を深めることができました。

小学部では、親からの自立、逆に親の子離れ、ノーマライゼーションの実現、高等部においては自立支援法や施設、グループホームのあり方、等の課題が現実問題として迫っています。

小中学部は、直接学校を卒業する段階ではなく身近な問題として捉えられないということもあり保護者の方にいろいろ課題等を知っていただく必要があることも確認されました。

【宮川】中学部からは、各学年ごとに実施した人権学習の資料を出させていただきました。「ロボットバートの疑問」というビデオを見た後、身近に存在する性別にとらわれた考え方に気づき、「男女が互いに対等なパートナーとして尊重しあって生きていくためには」というテーマで話し合う形式で行いました。いつもと違う授業形態でしたが、集中して取り組めたようです。二つ目は私が関わっている一年生を対象に行いました。身近な絵本「ノタンシリーズ」の中の題材をペーパーサートとして作り直し、それを見せながら集団生活するためのルールの大切さを経験させる授業をおこないました。その授業を受けた後に本当のブランコをつかって順番に遊んでいき、友達の存在を大切にすることを身に付ける学習を行いました。

【大角】それぞれの学部での今年度の取り組みについて簡単にまとめて紹介させてもらいました。聞いていただいてご質問があればお願いします。

【大溝】私は以前に知的障害者の施設におりました。そこでは、これはやってはいけないこと、やってもらわないといけないこと、できたらやってもらいたいこと、今ここまでできて次にどうつなげるかなど、つながりを意識した指導を経験してきました。具体的な例ですけれど、以前 O157がはやった時に、「手を洗いましょう、洗わないと食堂には入れません。」という指示を理解していただく必要がありました。言葉の説明が入らない方に対しては、これをしなければ次のステップにはいけない、これがいけたら次のステップにという風に、具体的でわかりやすい形で提示したことがありました。

また、性的な被害を防ぐためにはどうすればよいのか。これは対象になる方がどれだけの認識力を持っているかにもよりますが、ロールプレイングで役割を演じることで要点をつかんでいただくという試みも経験しました。声をかけられたときにあなたはどうするのか、実際にそういう状況でどのように演ずるのかということを通して学習を進めます。その中で「それではだめだよ、こうするんだよ」というやり取りを何回か繰り返してもらって理解を深めます。また、注意する者がどんなところでどんな気持ちになっているのか、ということを知っていただくこともできます。子どもたちも一回経験すると、こういう状況の中でも嫌だということを言いやすくなってきます。ただし、現実とロールプレイングでは違いますので、必ず言えるとは限りませんが、かなり声を出しやすくなってきます。また、いろいろな状況のなかで次にどういう風にすればいいのかなどの流れも理解しやすいようです。ことばで「知らない人の車に乗ってはいけない」ということは聞いていますが、そのような状況が実際にはどういう場面なのかがイメージしやすい。また、役割を交代することによって「引っ張られたらどうする」ということについても演技してもらって「あ、こういうことを言っているのか」ということで実感として理解しやすい人も多いと思います。引っ張り役になった人も「引っ張り込もう」というのが役割なのでそれを一生懸命にやろうとするし、それに対してどう対処するのかということについても真剣にやろうと

します。

【大角】実際にこのロールプレイングでは先生が演技を行い、それを子供が見るということですか。

【大溝】先生が生徒になり、生徒が先生になって声をかけたり、いろんなパターンで取り組みます。ひとつの劇が終わると子供に「君やったらあの場面ではどうしていた？」「どういうことをしたからどうなった？」などいろいろな質問をしたり、いろいろな場面を設定してみると面白いと思います。自分が自分と違う役割を演技したときは新鮮な体験になると思います。

【大角】全体でやることも大事ですが、グループで進めていくとよりわかりやすいようです。子どもの実態に合わせてやり方を工夫することが重要です。

【大溝】どの程度リアルにしたらいいいのか、あまりリアルにしたらそこで硬くなってしまふ、しんどい思いをさせてしまうこともありますので、そのあたりは相手の方に合わせてということになります。

【大角】一人一人の生徒の実態の違いからロングホームルームで行うよりは、グループ別の学習で、時間を設けてやるという方法も考えられます。言葉かけだけで理解し行動できるのであれば、ロールプレイング等がいいかと思いますが、知的なレベルの異なる生徒が在籍しているので、視覚的刺激、具体的には図や写真、絵、ピックなどを示しながらステップを踏んでいくという方法もあります。これをクリアしたら次はこれと具体的にわかりやすく、理解を深めていくことが重要だと思います。

【吾妻】一緒に車椅子のダンスをやっているんですが、特定の教師に対して「かまってほしい」、「車椅子を押して欲しい」という思いが強い生徒に、どのように関わってあげてほしいのでしょうか？

【大溝】別の言い方をすると、ある枠組みがあればその中では枠組みに応ずることができる力があるということですね。枠組みをわかりやすくするとか、ローテーションなど順序を理解させるなど、わかりやすい設定を作っていってあげればどうでしょうか。高校生ぐらいになると好みがはっきりしてきます。逆にいうと「あの人が喜んでくれるならがんばろう」という思いが出てきます。男性教員がいると、例えば「高い、高い」をしてくれるとか、性差をどれだけ意識しているかはわかりませんが、状況が変わることを子どもたちは敏感に意識しているようです。

【大角】いろいろな集団活動の中でいかに自分をコントロールしていけるかということもありますね。私も以前に人前でわざと裸になるような生徒を受け持ったことがあります。何か伝えたいことがあるので信号を出していると考えました。その信号を出す必要がないように普段からよい関係を作ること、表出した現象だけを抑えようとするのではなく、そのような行動を何でしようとしているのかについて掘り下げて考えることが大切だと思います。

【村井】先ほどの高等部の生徒さんのお話を聞いて、細かい事はわかりませんが、子供自身が自分を大事にしてくれる先生はわかるというのは大事なことだと思います。最終的にどの先生にも関わられるようになることが大切ですが、はじめの取っ掛かりとして自分を受け止めてくれる先生を見つけることが重要です。どのような重度の子どもでもそのような認識ができるようになることは大事なことですし、またそれがわかるようにこちらも人間関係を大事にしていくことが大切だと思います。

質問ですが、中学部段階では、異性とのかかわり、距離の保ち方、ルール、マナーをどういう場でどう教えていくのか。発達段階にもよりますが、非常に難しいです。発達段階の高い子どもには、言葉で伝えるという方法も考えられますが、言葉の理解が難しい子どもにどう教えていくかのプログラムを考えていけないといけません。保護者には、いろいろな事件が起っている中で、人との距離、関係、ルール、危険の認識を教えて欲しいという要望があります。

【辻】「ちょっとでも顔を知っている人に、車に乗るように誘われたらどうしますか？」と生徒たちに聞いたことがありました。全員が車に乗ると答えました。一回道を聞かれて次の日に会えば、もうその

人は子どもにとっては知っている人になっています。登下校時、どんなことがあっても、自分では絶対について行かないようにという方向で教えました。身を守ることが大事だという意味で、ちょっと寂しいけれどもそういう教え方をしました。

【大溝】こちらが考える定義付けと子どもの考える定義付けとが一致しているかどうかを確認しなければなりません。塾の先生の事件ではないですが、知っている人に危険な目に合わされる事件もたくさん発生しています。どうしても尋ねる必要のあるときは、制服を着ている人は公共機関で働く人が多いので、比較的安心かと思います。

【大角】今話題のメインは中学部の人権教育の、「ロバートバートンの疑問」というところだったのですが、子どもたちの反応はどうでしたか。

【宮川】レベルが高いかなと思ったんですが、子どもたちの反応が比較的良好で、一回で終わらせるのではなく、また次につなげていきたいと考えています。

【大角】今後、人権担当の先生方が、学校で統一した方向性でやっていくことが大事であり、根本的にどうしていくのかということから再スタートしてほしいです。特に発達面への配慮、工夫を検討しながら人権教育を進めていただきたいと思います。さて、人権教育に関してポイントとなるアドバイスをいただきたいと思いますが。

【大溝】一人一人を大事にしていくという中で、何が伝わるのか、何がどのあたりまで伝わっているのか振り返りながら・・・になると思います。丁寧に進めることです。そうすることによって、いろいろな家庭の問題やさまざまな問題も全体として受け止めていけるのではないのでしょうか。

【大角】人権研修の話にもどりたいと思います。職場での人権の問題には、例えば教師のセクハラの問題、教師から生徒への人権侵害、生徒から生徒への人権侵害が考えられます。生徒から教師というのは本校ではないと思います。今年度は、教職員対象のセクハラ研修をしました。1月にもエンパワメント堺の先生をお迎えしての研修が予定されています。先生の意識の変化等はどうでしょうか。

【辻】先生方の人権意識がここ二、三年高まっているのは感じます。この研修によって高まったというのではなく、いろいろな問題があったり、注意喚起されることがあったり具体的な事例があったりする中で、人権意識や職員の言葉などに変化は感じられます。次回の1月の研修には、講師が2名来ていただけます。内容も大変期待しています。

【山田】この研修は、参加された先生一人ひとりをまず大切にするというところから出発します。「人権？ そんなんもういい、いらんいらん帰って」そんな反応が高校生ぐらいになるとあるそうです。そこから出発点で生徒の生の反応をうまく研修に組み入れていきます。どんな反応があろうとそれを受け止めてみんなでこうしていこうかというスタンスが、ただ聞くだけの研修ではなく自分自身が主体的に参加しようという気持ちにつながります。場にふさわしい問題を見つけていただいたり、まず私たちの気づきがあって、そこからなにかを発展させられるというようにすすめていただけると思います。

【大角】人権を意識しながら、その場その場の話題はいろいろと変わってくる。そういう捕らえ方ですか。

【山田】はい、この研修はすごく柔軟性があります。後で振り返って人権についての研修だったんだなどそんな感じですね。押し付けられるのではなく、自分で気づくことができる状況を作っていくかれます。

【大溝】押し付けではなく自分で気づくことを、私たちはリフレインという言い方をしますが、フレームワーク、枠組みを変えると違ったように見えることがあります。そこを肯定的に捕らえて、次への

変化へつなげることが重要です。参加している子どもたちに「何でここへ来ることになったんや」という枠で質問すると、その子はすごく大事なことをちゃんとやってる風な返しをしてくる。そこに注目して、その子には「いやなことをいい加減に流して適当にしていなくていいところは見せてもらったよ」と返します。そして「また、あらためてここで話し合おう、一緒に考えよう」ということに理解を示して継続して参加してくれます。人権、人権というのはいけません。「この場にはそぐわない話題だけれども、そこから次、どうして行こうか、あなたの思いを聞いたうえで、それと矛盾しない方法を一緒に考えていこう」というように次につなげることが重要です。その辺を上手にやっていると、それを見ているメンバーも、いややなという思いはどこかに待っているけれども、「ちゃんと受け入れてくれているんだ、自分も参加しているんやな」という思いに気付かせるという方法を実践されているのでしょうか。

【大角】一学期に一回、三学期に一回の年二回の研修計画ということですが、回数ではなく内容が重要です。先生方がどれだけ意識して研修されるのが大切です。また、研修の進め方、あるいは現実の課題に対しての研修を計画することが肝要です。

【大溝】年二回の研修だけだと素通りしてしまうかもしれませんが、そこで何かの引っかかりが残れば、またどこかで、もう一回振り返ってみたり、「あの時ああ言っていたのはこういう意味だったのか」など振り返ることができます。時間を置いて考えてみるきっかけが何か残っていくような形で進めていければよいですね。

【大角】最後に質問があればお願いします。

【山田】喫煙の被害であるとか、ドラッグであるとか、いろいろ教えたいことがすごくたくさんあって日々の指導を続けているのですが、「生徒たちは全部わかって卒業していくのかな」という不安があります。保健室でも、「生徒にもわかりやすいテキストを一緒に作っていきましょう」ということで動き始めているのですが、卒業後に向けて何かありましたらアドバイスをお願いします。

【大溝】卒業してからそれぞれの場で働くわけですが、それぞれの場で自分が必要であるという「居場所」があるから続くということがあります。また、子どもたちはいろいろな形で SOS を出しているわけですが、そのサインを感じ取れる感性をこちらがどのように持つかということでしょうか。

【吾妻】ロールプレイングでは演じ方が上手な人はうまく役の中に入っていく、つまり感情移入がうまいと思うのですが、私はなかなか上手くできません。見る人がそれを見てどのように感じるか、もしくはどう考えさせるのかというのが大切かと思うのですが、どうすれば上手くなっていくのでしょうか。

【大溝】「その人だったらどうするのか」、「そういう役割やったらどのように動くか」、「その人だったらきっとこう動くだろうな」というイメージーションが大切です。自分で考えることがすなわち演じるということだと思います。また、自分が演じているけれど「何か変だな、なりきれないなあー」という気付きやずれとか違和感も大事ではないでしょうか。なりきれないから勉強になる。そこでのずれや違和感があるからこそ「気付き」になるのだらうと思います。

【村井】学校や大学、企業などでは人権研修の重要性が再認識されだしたと思うのですが、いろいろな人権に関わる機関、特に子ども家庭センターなどの研修は、どのような形で取り組まれているのでしょうか。

【大溝】職員のメンタル面での健康管理も含めての研修がどこまで行われているかと言うと、少しおざなりになっているところがあります。ストレスフルな職場で物理的にも非常に忙しい、緊張を強いられる状況です。働くものの人権を守ると言うことは大事ですが、まずは子どもを守らないといけないということで、職員は二の次になりがちですね。

【大角】時間になりましたが、今日は非常に具体的なご指導をいただいたと思います。特に人権教育については、今日のお話を参考にしながら進めていただけたらと思います。研究推進部の先生

が、ロールプレイングの設定の仕方や新しい研修材料を、いろいろな研修に行き取り入れております。1月には研修もありますが、来年度はどうしていくのかということも研究推進部の方で検討していただければと思います。

【大溝】人権教育ということで何をどうしているのかわかりませんでした。自分の経験の範囲でしか答えることができませんでした。いろいろとたずねて頂いたので、それについてはこう考えるというやり取りになっていたと思います。

【大角】本日はお忙しい中ありがとうございました。十分に勉強になりました。次回の第3回学校協議会もご予定のほどよろしく申し上げます。

## ＜地域連携小委員会＞

【高田】本小委員会のテーマとしては、①余暇活動支援 ②養護学校のセンター的機能と校内組織 ③地域連携ネットワーク構築 とありますが、テーマを絞りたいと思います。まず大川教諭より本校のホームページと今後の構想について説明がありますので、地域とのつながりという観点でアドバイスやご意見を申し上げます。次に地域連携委員会より資料としてネットワーク表を配布していますが、それらと集計について説明を聞いていただいた後に、これを今後いかに活用すればよいかなどのご意見をお願いしたいと思います。ネットワーク表と集計については個人情報に関わる可能性がありますので後ほど回収いたします。

【大川】(資料に沿って)本校のホームページは4年前に立ち上げましたが、その後公の教育機関としての JIS 規格が公示されたので、それを基に昨年作り変えました。内容的には十分とは言えません。本校のより適切な、求められる情報をのせられるよう更新に取りかかっているところです。

【高田】では個別の支援ネットワークについて申し上げます。

【中村】今後地域や他機関との連携がますます求められることに備えてどこから着手すべきかということで、昨年山本委員のアドバイスにより、個人と地域との繋がりをチェックアップすることにより何かが見えて来るのではということから始めました。資料のように5つの領域に分けて表を作り、記入しました。個人情報保護などデリケートな問題はありますが、この調査を行い、小中高各学部でこのような結果を得ました。

【高田】補足しますと、昨年度の学校協議会で山本委員より「市町によってサービスに差があるのでは」というご意見を頂戴したことから、今回の集計にあたっては市別の資料にしています。また表の数字は保護者の了解のあったもののみ挙げています。

【石井】(資料に沿って小学部の説明) 表は市町別に、暮らし・学校外の活動・医療・学校関係(本校以外)・その他 の5つの領域に分けて利用しているサービスの状況をあげています。同じ人が複数のサービスを利用しているので、利用人数と延べ人数の両方をあげています。

【依藤】(資料に沿って中学部の説明) 右端に5つの領域ごとに26名中に占める割合を%で示しています。大体は小学部と似ていますが、中学部は医療関係が多く、また小学部のように学童保育がないことも要因としてあるのか学校関係は少なくなっています。

【藤原】(資料に沿って高等部の説明) 高等部では受けているサービスを障害別にするか否か検討中です。進路に直結しているので、ファイリングして来年早々家庭訪問・懇談で担任が活用できるようにしたいと思います。

【高田】参考までに本校の児童生徒の概略を付け加えておきます。全校117名在籍で、小中高が1:1:2の割合です。およそ小中学部が肢体不自由を主たる障害である児童生徒であるのに対して、高等部は約37名肢体不自由が主・約27名知的障害が主となっています。医療的ケアを受けている割合は、小学部が6割近く、中学部が約5割、高等部では3割近くとなっています。

さて資料についてのご質問などお願いします。

【上野】保護者として資料の記入をしました。漏れているデータがあるので載せてください。

【三阪】データのまとめ方が小中高バラバラでちょっと分かりにくいですね。施設名も統一されていないので、例えば<ショートステイ ライフプラザ>も<あかつき>も同じです。名称がダブっています。整理されると良いと思います。整理したうえで各市の施設の利用状況をまとめてデータにすればもっと利用価値があります。

【上野】施設名のバラつきは多いですね。

肢体不自由と知的障害の両方がいる中で資料を見た時に、これは知的に勧める施設か肢体に勧める施設かがわかりません。保護者から聞かれたとき、子供の状況により紹介できる所がよりの確になるようなデータがほしいです。この施設は肢体・これは知的など大まかでよいので、そういう情報が必要です。

【三阪】医療関係の所に救急がありません。これも必要な情報ですね。

【高田】保護者の協力でここまでの資料ができたわけですが、これをどう利用するかということについて、どうでしょうか。

【中村】まず担任にとっては学校外での子供の生活についてより理解が深まる。施設についても理解が深まる。これが第一です。地域連携委員会としてどう活用するかについて、資料がやっとできたところでまだ討議されておらずはっきり掴めておりません。

【三阪】肢体に関わって、業者関係の情報もありませんね。例えば<〇〇義肢>など、これも必要とされる情報です。

それからこの施設を利用してどうだったか、良かったか、もうひとつだったか。

これも大切な情報だと思います。それが結果として良い施設を育て増やすことになると思うのです。

【高田】裏情報もほしいというのは分かりますが、それをどのように表に出すか、公の教育機関として悩むところです。

【藤原】ネットワーク表の記入項目の内容のところ、A:実態表の欄に記入して活用できるようにするのも一案です。

【三阪】相談支援事業もここには載っていません。保護者がどこにどう書くのか分からなかったのかも知れませんが。(暮らし)のところかと思いますが。

- 【高田】(分類)の中にははっきり入れれば書いてもらえるのではないかと思います。施設ではこういうデータをもっていますか。
- 【三阪】各個人ごとでもっています。医療関係が中心になりますが。
- 【依藤】本校では保健室が医療関係は一括してもっています。
- 【高田】市町ごとにサービスの中身の差があるということですが。
- 【藤原】豊中では卒業後も制限無くずっと続けて訓練が受けられます。
- 【上野】ずっと続けられるのがいいのか、集中してやって後、切るのがいいのか悩むところです。
- 【依藤】しかし、ずっと訓練が受けられる施設<しいのみ>は親にとってやはり安心だと思います。小さい時から継続的に見てもらっているという点でいいです。  
資料を見ると、どこの市町も阪大歯科に通っている子供が多いですね。限られた病院で扱われていることがわかります。
- 【高田】データを集計して、使い方・改善点など見えてきたことはどうでしょうか。
- 【依藤】今集計が終わったところで、この議論を参考に今後話し合うことになっています。
- 【石井】活用についても委員会で練っていくところです。
- 【依藤】例えば施設名を統一し、教師が知るべきことを整理し直すだけでも大事なことだと思います。
- 【三阪】ところでうちの子供は医療センターに行くのに学校を休んでいるのですが、医療と教育の連携で何か良い方法はないでしょうか。
- 【依藤】学校の行事予定表を参考にしたりするでしょうが、ドクターの診察日程が決まっているので難しいでしょうね。
- 【高田】小中高各学部の教師 3 名でなんとか苦労してこれらのデータを集めました。これが保護者や教師の指導に役立つようになれば、努力の甲斐があります。  
本会議のもうひとつのテーマ、ホームページの件、これから改善しようとしているところですがご意見やアドバイスをお願いします。
- 【三阪】当施設も頑張って立ち上げましたが更新が大変です。行事等の写真が載せられるといいのですが。了解をとらなければなりません。個人情報の問題がありますね。  
給食メニューを出している所があって、面白いと思いました。
- 【石井】おもしろいですね。メニューも良くなるなど良い結果も出るでしょう。
- 【三阪】民間ではパソコンでいつでも自分の子供の様子が見られる所もあるようです。
- 【高田】保護者としてどんな情報が欲しいですか。
- 【上野】よく見ますが、工事中(作成中などで内容が出ていない)が多いです。箕面は学校長の挨拶は更新されていますがほかはまだのようです。
- 【大川】ホームページは実際学校の顔です。しかし記事内容はよく吟味して慎重に出さなければなりません。公立学校としての公正さ、制限があって難しいです。
- 【三阪】確かに文言ひとつでも大切です。学校の実践交流会・先生の研究会・研修報告・T

EACCHプログラム・研究授業など役に立つと思います。

【高田】これから入学しようとする人、卒業後に行く機関にとってホームページは情報を得る大切なものですが、学校の日常の指導や教育課程の中身など知りたい情報ではないでしょうか。

【三阪】私の施設のホームページでは知りたいところが個人情報と関わっているので、個人を特定されぬよう工夫をしています。また保護者の同意書を取るなどしています。

【大川】情報は大阪府のネットワークで守られているので一応は安心ではと思いますが。

【上野】バス関連の情報がありませんね。

【大川】運行表ですね。これがあれば、「こういう地域からも通学している」ということが分かります。

【中井】入学したい人がホームページのどこを見れば本校に入れるか否か分かるのでしょうか。どこに住んでいてどんな障害があつて、入れるか、またどんなサービスが受けられるか分かりますか。

【高田】校区についての記載もないですね。年間行事予定表ものっていません。載っていないものが多いです。

【大川】施設関係でいえば、例えば廊下幅は？などたくさん必要事項があります。受け手として何を知ったらこの学校のイメージが湧くか、ここが欠けています。そこが知りたいです。

【松尾】例えば、＜A君の一日＞のような形で学校生活を紹介すればかなりイメージが具体的になるのでは。教師にとっては分かりきっている日常の活動が、外部の人には全く分からないし、それが一番知りたい情報ということでもありますね。

【高田】時間も迫ってきましたがジャンルを問わずその他なんでもご意見がありましたらお願いします。

【中井】ネットワーク表について、市町からの情報はどうでしょう。資料に載っている施設はただ単に保護者が利用している所だけですか。その他の施設もあると思いますが。

【三阪】箕面でいえば＜雇用支援センター＞などもぬけていますね。実習生を受け入れている施設も他にあります。

【中村】市町の資料は進路がもっていてファイルにしていますが、その全てが担任の頭に入っているわけではありません。最低これだけは知っているという状況にしたいと思います。

【依藤】施設の数も大変多いです。名前の整理も含めてもう一度整理し直す必要があります。

【上野】生徒の利用している施設から把握整理してまとめることから始めるのもいいですね。

【岩本】進路部へも市町の情報が結構次々として入って来ます。まめに情報提供をしなくてはと思います。

【上野】しかも状況がよく変化するので、まめに情報を集め伝える必要がありますね。

【中村】以前は進路を担当して仕事すればそういった情報はだいたい分かったものですが、いまはとても複雑で分かりにくくなっています。情報量も多いし名称も難しい。

【三阪】保護者のパソコン保有率はどうでしょう。一方的にホームページだけでは駄目ですね。メールでの問い合わせに答えきれないこちらの状況もありますし。

【高田】いろいろご意見が出て盛り上がっているのに残念ですが時間です。本日はご出席ありがとうございました。次回は2月28日(火)午後の予定です。またよろしくお願いします。

## ＜支援計画小委員会＞

【山口】本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。今日の進め方として、まず内藤委員と木津委員に発言をいただいてから担当者が説明していく、というようなやり方でいきたいと思います。

【木津】自立支援法の改正により、支援計画を見直す上でどのようにしてどのような視点から見直していくのか、また、それを支援の中でどう生かしていくのか考えていけたらなと思います。個別の指導計画が小、中、高それぞれ項目や形式が違うのは当たり前だが、どこにポイントを置いてこのように個々独立したものになっているのか聞かせてほしい。小から高まで積み重なっていく上で流れのようなものがあると、次へ伝えやすく検証していきやすい。集団の中で子どもを育てていく視点がどこまで盛り込まれているのでしょうか。長期目標、短期目標とあるが、それぞれどれくらいの期間をイメージしているか具体的に知りたい。長期目標の上に短期目標が成り立っていると思います。高等部を卒業してその後の生き方、例えば家族から離れて生活して行ってほしい、といった家族の思いなど長期的に見た目標が盛り込まれているのでしょうか。また、発達的な押さえ、障害状況、生育歴はそれぞれ学部独自で記入の欄があるが、そうではなく、子どもの基本的なベースがあってその上に書き加えられていく、という流れみたいなものにならないでしょうか。

【山口】布留川委員が「IEPのようなものが日本にもできないものか、卒業後のステップアップのために重要な書類としてずっと引き継がれていけないか。」とおっしゃっていた。学校の個別の指導計画も現在は保護者、医療機関などさまざまな意見を聞いて作られています。

【内藤】医学ではSOAPという分け方によって記載されています。Sとは主観的な、Oは客観的な、Aはその答え、Pは実際に何をしたのか、という意味。学校にもこのようなカルテが存在してもよい。この学校に在籍する子どもの12年間という期間を通した記録を残し、一貫したものがなければなりません。そしてどこまで到達したかを評価することが必要です。小、中、高とぶつ切りでは子どもの姿が見えてきません。統一した一貫性があることが大切です。目標を持ってその目標に対してどこまで到達したか、というカルテ形式のファイルみたいなものが必要です。そしてそのカルテは引き継がれていかなければなりません。子どもが大人になるための目標があるように、身体的、精神的にハンディがある人も将来に向かって目標が掲げられてもいいんじゃないでしょうか。そしてその目標は常に変化していくもの。その日その日の対応に終わらないように。

【山口】お二人の発言をふまえたうえで各担当から資料の説明をお願いします。

### <個別の支援ネットワーク表から>

【早原】このネットワーク表は、昨年度の学校協議会地域連携小委員会のほうの、それぞれの子どもの地域でのかかわりを集積することで見えてくるものがあるのでは、という助言を参考にして作成したものです。まだ未完成的な面もあるので助言をいただけたらと思います。

【木津】小学部から高等部まであるのですか。

【早原】担任に作成してもらい、小中高全員分そろっています。

【木津】ここまで広がっていかないと、支援は学校だけではやっていけません。

【中村】ネットワーク表により、さまざまな施設、病院などを市ごとにまとめ、子どもたちにこういった施設があるので利用してみたらとすすめたり、この市にはこんな病院があるなど情報提供の場になればと思います。

【内藤】このネットワーク表の施設利用一覧表（右半分）はどのくらいの期間で更新しているのですか。

【中村】利用施設や機関が変わると担任が書き換えるようにしています。

【内藤】子どもがどこを今利用しているかを見るにはわかりやすいが、時間軸で見た場合、どのように活かされるのでしょうか。例えば、小学部の子どもが6年間どこを利用したかを見ることでどんな変化があったか。そのダイナミックな部分を見ないとただの便利帳になってしまいます。面倒くさいかもしれないが学期ごとに見ていき、利用の追加、削除等あればそのつどファイルとして作成していけば、見直したとき、子どもたちの成長ぶりが見えてきます。1枚の紙に、変化があったところだけ赤ペンなどで書き換えるのではなく、一枚一枚更新したものを記録として残していくことが大切ではないでしょうか。

【木津】ヘルパー、ショートステイの利用は家の状況を把握するひとつの手立てになるので、支援計画の中の項目として入れておきたいですね。

### <個別の指導計画について>

【山口】3学部の一貫性について教務部でも探ってみました。いわゆる初等教育、前期中等教育、後期中等教育あるいは義務教育というくくり等にわけられるためとても難しい。地域連携委員会では一貫性を意識した個別の支援計画のようなものを考えている、と聞いています。現時点でも、自立活動部では一貫性のあるものを意識して作成しているようですが。

【谷口】個別の指導計画のうち、子どもの生活面での指導計画は教務の方で、からだの面では自立活動部の方で様式の一本化を思案しています。小、中、高とも中味を見ると項目がほとんど一致しているので、これをどうするかを1月に決め、試行的に来年度4月から実施していき、全員の教師に書いてもらい、意見をいただくという流れになっています。各学部の独自性を見つつ、箕面養護の12年間の一貫性というものを考えていかないと将来の移行支援計画につながっていきません。高等部では卒業後の進路先に、子どもの様子や実態などビデオや指導計画を持って引き継ぎを行っています。今、私は小学部にいます

が、中学部からの6年間を見据えて6年後にどのようなお子さんになってほしいかを保護者と話をします。「〇〇のような子どもに育てほしい。」「それでは〇〇のようなことをこれから6年間でしてかなければなりませんね。」というように、具体的な話にもっていきます。例えば子どもの車椅子ひとつとっても12年のスパンで考えていかなければなりません。自立活動部では、一貫性のあるものとして3学部統一したものを一枚、そして各学部の独自性を活かしたものをもう一枚作成することを検討しています。先生たちのいろいろな意見を取り入れ、これから1年間かけて考えていくつもりです。自立活動の指導計画の長期目標は1年間、短期目標は学期ごととなっています。小学部は、子どもの指導にあたる時、一人の教師が複数の子どもを担当したり、教師によっては慣れた教師とそうでない教師などさまざまなので、自立の時間の担当者は学期ごとに変わっています。中学部は担当者は一年ごとに変わっています。

【内藤】この自立活動の個別指導の用紙はコンピューター入力でしょうか。何行で書くようにと指定がありますが。

【谷口】高等部は指定があるが他学部では、からだや生活面での記入が必要な場合、大きく枠を設けて記入するケースもあります。A4に記入するところも子どもによってA3になることもあります。

【内藤】ひとつの学校なのにこんなにもたくさんの縦割りがあるんだなと思いました。この学校に限らず、日本のどこでも縦割りが重視され、横のつながりがとても希薄です。この様式ひとつとっても別の組織だとイエスといわない。あえて合わそうとしない。横のものどうしが話し合っただけでどうやって共通のものを作るかが大切です。共通のものを作っておくと項目に書かれていることの経時的な変化がとてもわかりやすいです。少なくとも義務教育の段階の小学部、中学部は統一すべきではないでしょうか。同じ視点で見えていってどれだけのものが達成できていっているかを書き留めていかないとはいけませんね。それがずっと引き継がれていかなければなりません。そこに様式の統一の意味があるのだと思います。

【木津】子どものからだや内面の12年間の変化がわかる資料があればとても参考になります。どんな教育を受けてきたか、どんな支援を受けてきたか、また、教師と子どもの関係、生育歴、家庭の様子など知ることによって今後の解決の糸口になります。一貫した書式があると20代になっても30代になってもつなげていけます。例えば過去にこのような指導があっただけで今につながっている、などがわかる場合があります。学校から作業所などにつなげていけるものがあればいいなと思います。健康面に加え、コミュニケーション力の記載の部分もあればいいですね。特に作業所では必要になります。

【泉】(資料の説明)

進路担当者、保護者、担任による個人懇談があります。一年の時の実習については「まずどうするか」から始まります。今いわれている「PLAN DO SEE」つまり、どういう実習をするのか、どういうねらいがあっただけでどこへ実習に行くのか、狙いに対してどう

だったのかを評価をしていき反映させるという流れにして、それを2年、3年と積み重ね、進路決定に向けていきます。また、卒業後の進路先にも引き継いでいきます。この流れが移行支援となっていると考えています。「学校での活動報告申し送り事項」という資料には、3年生のときに将来の生活についての希望や支援方法について、保護者と話し合い、その内容を記入しています。3年の1月に各地域の支援センターの方に来校してもらい、本人、保護者、担任、学校が地域でどのような支援を受けることができるか等について相談の場を持ちます。医療的ケアの必要な子どものケースも考えて看護師のいる施設を地域が用意していけるかが大きな課題となっています。

【内藤】このような個人情報が入った資料が進路先に行くというのは、気をつけなければなりません。法律上、規制がかかっているところなら安心ですが、そうでないところは情報漏洩のことを考えると法的に気がかりです。安易に出すものではないと思います。

【木津】施設としては必要な資料なので、この個人情報を出す場合は保護者の同意のうえで提供していただきたい。目的のところに戻るが、小学部の子どもが中学部に上がったとき、中学部の子どもが高等部に上がったとき、高等部の子どもが卒業して社会人になったときを考えると、その1年1年というよりは将来どういう力をつけていくべきなのかを見通して教育をすすめることが大事ですね。例えば小学部の先生は高等部を卒業したあとの施設など見学して、今担当している子どもが将来どんな姿になるのかを考えながら指導しておられるのかどうか。それがまた一貫性というものにつながっていくのではないのでしょうか。

【谷口】自立活動面での例をあげると、電動車椅子について12年間の中でどの時点で導入し、利用するか、という話が持ち上がったとします。電動車椅子の自走という目標に向け、その子どもの日常的な生活において様々な変化がありうる。いつから練習するかによって、またそのための装具が今までと変わったとしたら生活面の個別の指導計画はずいぶん変わってきます。自立支援法の改正により費用面で大きな負担が考えられ、気安く「作ってください」とはいえなくなりました。子どもの事を考えてどこでどういう目標を設定するのかという判断は、毎年担任が変わるので見解が違い、難しい面があります。自立活動のメンバーも結局長く担当できず、引き継いでいくような形になっています。そのため一貫性のある資料を残しておきたいという思いがあります。

【内藤】毎年担任が変わっても一人の生徒について伝えていける資料がきちんとあれば担任同士の見解の違いは少なくてすみます。車椅子ひとつとっても、なぜこのような車椅子にしたか、どう判断したかなど、一貫性のある資料、記録があれば次の担任へそのまま引き継ぎます。新しい担任もそのあとの動きがスムーズに行くと思います。早いうちから判断し、動いていくためには段差のない流れのある資料が必要です。今の指導計画書ではどこどこがつながっているのか見えてきません。

【木津】先生たちも、計画書の中のこの項目が、どうなっているのかを理解しているのでしょうか。

【山口】子どもにもよりますが、こういった資料よりも口述やビデオなどで伝えたほうがわかりやすいところがあります。

【内藤】この指導計画が活かされるようにしなければなりません。残すためだけなら意味がありません。口での引継ぎは時間がたつと忘れるので、資料として残し、データを集積し、データベースとして残すことで今後の対応の糸口になります。

【谷口】自立活動の個別指導の方は、来年4月から一本化に向け、試行実施という強引なやり方をするのでかなり批判がでると思います。教務部の方も生活面での指導計画の一貫性を目指し、がんばってほしい。

【山口】事務量のことなどがあると思いますが、子どもにかかわってくることなので役に立つことであればきちんと見直すべきでしょう。

【早原】「個別の教育支援計画」という世の中の流れもあり、本校でも作っていく方向になっています。しかし、具体的にはまだ何も決まっていません。それを議論していく段階です。時間軸で見ることとか、経時的なもので、というご助言をいただいたので参考にさせていただきます。今ある個別の指導計画やネットワーク表などをクリアファイル方式でまとめた形のものを考えています。もし、こういう情報を記載したら役に立つという情報があれば教えていただきたいのですが。

【山口】项目的に付け加えるところもあれば教えていただきたい。

【木津】どの先生がみてもわかるようなものであってほしいですね。

【内藤】本来、大きな課題であるので、このような小委員会でするようなものではありません。子どもたちの行動する力、決定する能力を助けるもののひとつが個別の指導計画です。子どもたちが過ごしてきたことを記録により残すためにも、基本的な様式の統一が必要です。縦割りではなく、横のつながりを大切にしてほしい。病院でも同じことがいえません。病院の専門性をはずしていろいろな科で一人の患者をネットワークのような網の目状に見ていく方向で進められています。ぜひ、いろんな壁を取り除いてほしいです。

【木津】いまや障害児教育での義務教育の役割を問われています。障害をもった人の生活を共有することでその人の将来を考えていけるのではないのでしょうか。

【山口】ありがとうございました。これで小委員会を終わりたいと思います。